

---

# いつか見た夢

いぬ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつか見た夢

### 【Nコード】

N7212S

### 【作者名】

いぬ

### 【あらすじ】

下駄箱に入っていた手紙。それは数年前まで家族だった神楽坂から送られた者だった。

(前書き)

恋愛のようなくわからないものです。いろいろ微妙な関係です。  
テーマは「家族」

もともと数年前に書いたものですが、発掘できたので投稿してみました。

至らないところだらけですが、もしよろしければ読んでみてくださいください。

下駄箱を開けると、手紙が一通。上履きで隠されるように置かれていた。

一度閉めてネームプレートを確認する。

『小鳥遊 豊』。

確かに僕の下駄箱だった。

開いてみると、中央に丁寧な文字で『今日、家に行くから』と書かれていて、下の方にイニシャルと思われるローマ字が『M・K』とあった。そのイニシャルに該当する人物を頭の中で検索し、出てきた人数から僕の家を知っている人間を絞ると、一人だけ該当した。それを確認すると、その手紙を鞆に仕舞い、上履きを取り出した。

教室前に着くと中からざわめきが聞こえてくる。

ふと、何故会話がいくつも重なるのとただの雑音になり下がるのだろうかと考えた。

それが人の限界なのかと勝手に解釈し、そう考えると聖徳太子は実は人間ではないか、もしくは本当は十人の言葉を聞き分けることなど出来なかったのではないかと思えてしまう。歴史が一部の人間にとつて都合の良い方に変えられてしまうことなど当たり前に行われている。何が真実なのか分かったものではない。だからと言ってテストにはそれが答えとして出てしまうのだから、信じないわけにはいかない。よく出来たシステムだなと、それに見事に組み込まれている自分を自虐するように嗤い、戸を開けた。

途端、雑音が途絶えた。

僕が来たから会話を止めた。そんな感じだった。だがそれも少しのことで、すぐにまた会話が始まる。

妙な違和感を感じた。

僕が来たから、今まで話していた話題を逸らした。そんな空気が漂っている。

視界が歪み、目の奥から鈍痛がする。  
ズキン、ズキンと。

見たくない何かを拒絶するように。  
掛けている眼鏡のレンズに触れないよう、指で眉間を押さえ、僕は息を吐いた。

大丈夫……大丈夫、大丈夫。

自分に言い聞かせるように、心で呟く。それが功を奏したのか、少しずつ痛みが引いてきた。そんな僕の様子を心配したのか、近くのクラスメイトが「平気？」と訊いてくる。僕はそれに「なんでもない」と応え、自分の席まで誰とも目を合わせないように下を向いて歩いた。

窓際。後ろから二番目。

椅子に座り鞆を足元に置く。ロッカーが教室後部に設置されているのだが、ほとんど使用していない。中にあるのは埃を被った参考書だけだ。

机に肘を付き頬杖を付きながら外を眺める。

何を考えるでもなく、ただ鉛色の雲をぼんやりと追う。

止むことのないざわめきが嫌でも耳に入ってくる。

“昨日のドラマ、見た？”

“見た見た、あの展開はないよねー”

“あのポストどうやって倒すんだ？”

“あれ、普通にやっても倒せないぞ”

“今日ゲーセン行こうぜ”

“昨日のあいつ超ムカつくし。今日はぜってー勝ってやる”

“二組の佐藤さ、告白したらしいぞ”

“え、マジで？”

“振られたらしいけどな”

“ハハハ、そりゃそうだ。あいつ何か気味悪いし”

“ねえ聞いた？ 三組の渡辺さん。二組の佐藤君から告白されたらしいよ”

“ えっ、マジ？ きもー ”

“ あれはないよねー ”

テレビの話。

ゲームの話。

放課後の話。

他人の噂話。

“ ねえこの前見ちゃったんだけどさ、神楽坂さんが…… ”  
教室の戸が開く音。

波が引くように、ざわめきが消えていった。目をやると、一人の女子生徒が教室後ろの戸に立っていた。

髪を茶色に染め、肩にかかるくらいのセミロング。ブラウスのボタンはわざと多めに外され、スカートの丈はクラスのどの女子よりも短い。このクラスにおいて完全に浮いた格好をしているその女子生徒は真っ直ぐに僕の方へと歩いてくると、僕の後ろの席へ鞆を置き、踵を返して教室から出て行った。それに合わせるように、また会話が始まる。

今度は意識をしてそれらを耳に入れないようにした。

かぐろさか  
神楽坂 まなみ  
愛美。

三年間同じクラスの女子生徒。

特に親しくなく、高校に入ってからまともな会話はしていない。

それでも、先程の手紙は神楽坂が入れたものだろう。僕の家を知っている女子生徒は神楽坂しかいないはずだ。

何故なら僕と神楽坂は双子で、数年前まで家族だったのだから。

両親が離婚した。

原因は父の浮気。よくある話だった。家庭は崩壊し、僕らはそれぞれ親に引き取られた。

僕は父に。

妹は母に。

そして妹は母に連れられ家から出て行った。僕らがまだ小学六年の時だった。それから三年間。僕らは別々の中学に上がり、それぞれの学生生活を歩んでいた。

僕の中学生生活は酷いものだった。家庭が原因で苛められもした。今時父子家庭は珍しいことではないが、それでも何かしらの原因があれば苛められる。彼らはただ、僕で遊んでいるだけだった。そんな中でも僅かに出来た友人と共に高校へ上がり　僕は再会した。

再会してしまった。

たかが三年。

されど三年。

僕らが互いを分かりえなくなるのに、それは十分な期間だった。

僕が僕の中学生生活を送っていたことと同様に、妹も妹の中学生生活を送っていて、そしてそれが決して良いものではなかったことも何となくわかってしまった。離れ離れになり、再会して、そこで初めて僕は“他人”になった。

昼休み。

僕は屋上へと向かった。

教室では朝の続きと言わんばかりにざわめいており、居心地が悪かったからだ。

“これ噂なんだけどさ、あの子って……”

“この前駅前歩いてたらまたまた見かけたんだけど……”

馬鹿馬鹿しい。

誰に言うでもなく悪態を吐き、屋上への扉を開ける。『立ち入り禁止』と書かれた張り紙が風圧で少し揺れた。よくある話だが、屋

上への立ち入りは禁止されている。学校側が言うには「危険な為」らしい。笑える話だ。

この世界に危険ではない場所など存在していないと言うのに。危険なのは場所ではなく、いつだって『人間』だと言うのに。

外に出ると曇天の空。午後からは降るかも知れない。傘は 確か折りたたみが鞆に入っていたはずだ。こんな天気だからか、屋上に人の姿はない。いや、例えば天気が良いかろうと、ここに人がいることなど滅多にない。

禁止されているから、と言うのが一番の理由。

わざわざそんな真似をして教師からの評価を下げる生徒は進学校において稀な存在だ。

丁度良かった。

素直にそう思えた。

稀な存在、とは言え少なからずはいるのだ。たまにだが、出会ってしまふこともある。そんな時、僕はすぐに屋上から離れるようにしている。逆の場合は、相手が離れる。それがこの暗黙の了解になっていた。

僕は真つ直ぐ進み、フェンスを背に腰かけた。屋上が見渡せるこの場所は一人になりたいときや、他人に聞かれたくない話をするのに最適だった。

「それで」

僕はパンの包みを解きながら声をかけた。

「一体何の用事、武？」

僕の隣に胡坐をかいて腰かけた佐倉 武たけむらに問う。

昼休みに入るや否や「話がある」と僕を誘った。何となく話題が読めた僕は武を連れて屋上に来たのだった。二メートル近い身長を持つ武の隣に座ると、僕の体は普段よりも小さく見えてしまう。それが僕の僅かなコンプレックスだ。

「む。ああいや、そのだな……」

歯切れが悪い。



こういう時、僕にとってあまり良い話題ではないことが多い。聞きたくないのが本音だけど、他の人ならいざ知らず、武の話なら聞かないわけにはいかない。僕が武から貰った恩はその程度では到底返せないものだ。

来る前に購買で買ったパンの袋を、それが隠れてしまいそうなほど大きな手で開けると一口で半分以上を食べる。二口目にはもう全て胃袋の中へ消えてしまった。

それが三回ほど続き、武はパックのストローを口に啜えたまま言っただ。

「悪い噂を耳にした」

「うん」

パックのミックスジュースを一口飲む。

ゆっくりと胃まで降りて行く感覚が良く分かった。

「お前の……いや。神楽坂のことだが」

援助交際をしている、と。

「うん」と、頷く。それきり、武は喋らなくなった。

噂の立ち始めは数週間前のこと。誰かが見たらしい。

“あたし、この前神楽坂さんがサラリーマン風の人とホテルから出てくるの見たよ”

それが事実なのかどうかは分からない。知ろうとも思わなかった。最初はただの噂話程度にしか思っていなかった。

だが、噂は噂を呼ぶ。

ただでさえ閉塞的な空間だ。受験というストレスを抱えている学年、ということもあるだろう。すぐにそれらは背びれ尾びれを付け、学年中に伝播した。僕はとある理由から比較的早くその噂を耳にしたが、武を始め他の男子生徒に伝わり出したのはここ最近なのだろ。う。そうでなくては武が今になってこの話題を出すはずがない。

沈黙。

武は何かを考えているようだ。それを僕に言おうかどうしようか、迷っている感じがする。パンの袋がこすれる音とジュースを飲む音だけがしばらく続き、雨が降ってきた。

ポツポツと屋上に斑点を付け始めたので、僕らは片づけをして屋上を後にした。

結局武は何も言わず、僕も何も訊かなかった。

放課後になると雨も本降りになってきた。

さほど厳しい雨ではないが、傘を差さずに帰るには少し無理がある、という程度。昼のこともあり武と一緒に帰ろうか迷っていたが、武は部室に用があると言いHRが終わると教室を出て行った。ホツとしたのが半分。寂しさ半分、といった感じだ。

下駄箱のところへ行くと、十数人の生徒がいた。

傘を持ってきていないのか、空を見上げる生徒。

携帯で迎いの車を呼んでいる生徒。

友人の傘に入れてもらっている生徒。

鞆を傘代わりに走って帰る生徒。

それらを横目に靴を履き替え、鞆から折りたたみ傘を取り出す。

屋根の下から出るとポツポツと傘を穿つような雨音が妙に耳に障る。

「あ、ゆゝたか。今帰るところ？」

そんな音に紛れて僕の名を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると同じク

ラスの女子生徒。桐沢きりさわ 伊織いおりがいた。

「そうだけど」

一度区切り、傘をたたみ屋根の下へ入る。雨音が煩く、声が良く聞こえないからだ。

「そうだけど、桐沢さんは帰らないの？」

「生憎とね」

鞆片手に靴を履き替えているその恰好は帰宅の用意そのものだが、桐沢さんは足を外に向けてはいない。

何か用事でもあるのだろうか、と思つたが、鞆を持っていない方の手の平を返す動作に傘を持ってきていないのだと推測した。

「雨が降るなんて思つてなかったから」

そんな僕の考えを察したのか、苦笑しながら言う。

僕とは違い桐沢さんに友人は多い。人柄も愛想も良く、人の中心に立つのが上手い。クラス委員長をしているのも一役買っているだろうが、一番の理由はその容姿だろう。女子の中でも背が高く、可愛いと言うより綺麗。背中の真ん中辺りまで伸ばした髪はストレート。よく他の女子に羨ましがられ触られているのを見かける。

男女分け隔てなくとまでは言わないが、それでもクラスでは男子でも話しかけやすい部類に入る。クラスメイトの名前を名字ではなく下の名前で呼ぶのも特徴だ。

いつも誰かが傍にいる印象しかないんだけど、今は何故か一人のようだった。

それが顔の出てしまつていたらしく「友達が先に帰っちゃつて」と言い、ペロリと舌を覗かせる。

「酷い友達だね」

「だよー。いつも一緒に帰ってるのに今日に限つて『先に帰るか』なんて言うんだよ。もう、傘くらい置いてつてくれたらいいのに」

「はは」

それじゃどつちが酷いのか分からないよ、と言つと「そうだね」と笑う。時折見せる歯は白い。

「だから誰か知ってる人が通らないかとここで見張つてただけで、こういう時に限つて誰も通らないんだもん。どうしようかと思つちやつた。でも良かった。これで何とか駅までは帰れそう」

「ん？ 誰か来たの？」

周りを見渡すが、桐沢さんの友達らしき生徒はいない。遠巻きにこちらを、いや桐沢さんを見ているくらい。時折僕にも視線は向くが、あまり気持ちのいいものじゃない。

目の奥が、少し痛む。

「うん。来てるよ。とっても頼りになるお友達が」

視線を桐沢さんに戻すと、口の端を伸ばし僕を見ていた。

「えっと、それどういうこと？」

「あ、酷い」

ぶくつと頬を膨らませ、ふてた様な表情を作る。もしかしたら自分では怒った顔のつもりなのかもしれないけど、どちらかと言うと可愛い感じに見える。

「そうなんだ。豊にとってわたしは友達じゃないんだ。ふーん、そうなんだ」

「へ？ え、待って。というか、僕ら友達だったの？」

確かに、桐沢さんはクラスでは武に次いで話をする人だけど、他の人に比べたら僕との会話は圧倒的に少ないし、何より雑談なんてほとんどしたことない。クラスの行事の事とか、勉強のことくらいしか話したことないはずだけど。

「それ、ちよつと傷つくよ。豊？」

怒ったような顔から寂しそうな顔に変わる。ここで涙でも流せたら一流俳優だろうけど、まあそこまでされたら困るのは僕だ。

しかし、コロコロと表情の変わる人だなと思う。人に好かれるのもわかる気がする。

「二人で机を付けてあんなに仲良く授業を受けた間柄なのに、豊にとつてわたしはその程度の存在だったのね。ちよつとドキドキしてたのに」

そんなこと言われたら僕の方がドキドキするんですけど。頬を染めないでくれないかな。何か勘違いしちやいそう。

確か先週の事だったと思う。数学の時間、桐沢さんは教科書を忘れてしまったと教師に言った。普段忘れ物などしない桐沢さんが教科書を持ってきていないことには驚いたし、隣のクラスに借りに行かなかつたことは疑問に思った。隣のクラスにも友人はいたはずだ。そして何より驚いたのは、桐沢さんは先の言葉を言うなり、いきな

り隣である僕の机に自分の机をひっ付けて、「そういうことだから宜しくね」と言ったのだ。

驚愕し、困惑した。

僕じゃない方の隣には桐沢さんとよく話している男子がいた。そちらにお願いするのだと思いついていたから。そしてその男子から授業中ずつと嫌な視線が僕に向かっていったから。別にその時何かおしゃべりしたわけでもない。お互い普通に授業を受けた。授業が終われば桐沢さんは「ありがとう」と言って机を戻し、それ以来同じようなことはなかったし特に話もしていない。あれだけの事で友達なんだろうか。

「十分じゃないの？」

と言い、歯を見せて笑う。歯並びがいいなと、場違いにも思ってしまった。

学校から駅までは1kmもない。少し歩けばすぐに着く。それでも僕は沢山の話をした。あまり会話の得意でない僕からしたらそれは珍しい事だった。ここまで会話が弾むのは武くらいだったから。

相合傘が恥ずかしいと思っていたのは最初だけだった。話をしているうちにそんなことは何も感じなくなった。時間を惜しむようにゆっくり歩き、時折立ち止まって話をした。

特に話題が武に及んだ時が一番盛り上がった。

「ねえ、そつういえば武君のことなんだけど」

「うん？」

「何である人“園芸部”に入ってるの？全然雰囲気違っじゃない。もしかして運動苦手とか？」

「いや、運動は得意らしいよ。体力診断とかでもA判定もらってたし。何で園芸部なのかは一度訊いたことあるんだけど」

「うんうん。なんて？」

「お前には花の良さが分からないのか！」って怒られちゃった」

「ぶっ、何それ！ 変なの！ あはははっ！」  
「ははっ」

駅に着いてからも電車が来るまで話し込んだ。

「帰りも同じ方向だったら良かったのにね」

電車が来て、桐沢さんは別れ際にそう言い「じゃ、また明日」と手を振って僕らは別々の車両に乗った。

桐沢さんとは別の電車に乗り三駅。降りてそこから十数分歩いたところにある閑静な住宅街。そこに僕の家がある。鞆から鍵を取り出しドアを開ける。「ただいま」と言う声が誰もいない廊下に響いた。

一人暮らし、ではない。

昨日から父さんたちは旅行に出かけてるのだ。僕も誘われたが、断った。

溜息一つ。

ドアを閉め、忘れずに鍵をかける。

玄関から真っ直ぐ延びる廊下の先に階段。向かって左側にあるLDKの部屋を開け電気を付ける。途中のコンビニで買ったお弁当をダイニングのテーブルに置き二階へ上がる。上がってすぐ左手にあるのが僕の部屋。その奥に今はもう使っていない部屋が一つと、右側と同じく使っていない部屋。現在は二階は僕だけが利用していて、父さんたちは一階の、以前は応接室だった部屋を改造してそこを利用している。

出来るだけ距離を置きたかった。だから僕がそれをお願いした。向こうも、同じだったんだと思う。すんなりとそれを了承した。部屋に入るとドアも閉めず、服も着替えずベッドに転がり眼鏡を外して目を瞑る。

頭に繰り返し流れる桐沢さんの声。

不思議な感覚だった。

あれだけ話したのは今日が初めてだと言うのに、何だか昔から仲が良かったかのように錯覚してしまう。

また明日、か……。

また学校に行けば今日のように話せるだろうか。

もう少し長く話せるだろうか。

もう少し仲良くなれるだろうか。

はは、そんなわけではないか。

今日のはただの気まぐれ。

あれだけ話せたのは桐沢さんが話し上手だから。

桐沢さんは、誰にだって仲良くするんだ。

そう、僕なんて沢山いる内の一人でしかない。別に僕だけが話せているわけじゃないんだ。仲良くだなんて、自惚れが過ぎる。明日になれば今日の事は過去の平凡な出来事になるだけ。仲良くなる以前に僕らの仲は始まってすらいない。

それに何より僕は　僕はまだ一度だって桐沢さんの顔をはつきりと見たことないのだから。

夢を見ていた気がする。

何の夢だかもう覚えていないけど、何だか心地よい感覚だけが残っている。

今、何時だろ？

枕元に置いてある目覚ましで確認しようと手を伸ばすが、誤って落としてしまった。あっと思ひ捨おうとするが、その前に誰かの手が目覚ましに伸びていた。驚いて視線を上げると一人の姿が見えた。眼鏡を掛けていないのでぼやけたシルエツトしか見えないが、スカートを着ていることから女子であることはすぐに分かった。

「……………」

無言で差し出された目覚ましを受け取り、眼鏡を掛け確認。どう

やら一時間ほど眠っていたようだった。

頭上から吐息が聞こえる。見上げれば小さく開けた唇が見えた。

「あんた、部屋の戸くらい閉めて寝たら？」

呆れたようにそれだけ言うとその女子　　神楽坂は部屋から出て階段を降りて行った。

何でここにいるんだ？

そう思ったのは一瞬だった。そういえば今朝下駄箱にその旨を書かれた手紙が入っていた。

玄関の鍵は間違いなく掛けたはずだが、神楽坂なら問題なく入れるだろう。鍵の隠し場所は昔から変わっていない。

欠伸を一つ。背伸びをしてベッドから立ち上がる。目が覚めてくるとお腹が空いてくるのが分かった。そういえばまだ食べていない部屋から出て階段を下るとテレビの音。LDKの部屋から聞こえてくる。ドアを開けるとリビングのソファに身を沈めテレビを見ている神楽坂の後頭部が見えた。

挨拶はない。

ふっ、と息を吐きテーブル上のコンビニ弁当を取り出し電子レンジの中へ入れる。温まるまで数十秒。取り出し、テーブルについて神楽坂と背中合わせの状態のまま食べる。その間、一度も会話はない。

食べ終え弁当容器を分別してゴミ箱に入れ、急須で湯呑にお茶を注ぎ一息。テレビから流れてくるバラエティと思われる音が耳に届く。

二杯、三杯とお茶を飲んだところで神楽坂が話しかけてきた。

「今日、泊まっていくから」

それだけ。僕の返事を期待したものではなく、ただの報告。始めからそのつもりだったのか、よく見ればソファの脇に大きめのカバンが置いてあった。

「ふうん」

とだけ返し、片付けをして廊下に出ようとドアを開ける。



「まだ、帰ってこないんでしょ？」

「……何で知ってるんだ？」

父さん達二人が旅行に出ていることを神楽坂に話した覚えはない。そもそも、会話などしたことない。

「この前あんたと佐倉が話してるのが聞こえたから」

「ああ」

いつだったか教室でそんな話をしたことがあった。なるほど、だから今日来たのか。よくよく考えればあの二人がいるのに神楽坂がこの家に来たがるわけがない。逆に僕が出て行きたいくらいだ。

「いつ帰ってくるの？」

「知らない。一週間くらいって言ってた。少し遅めの新婚旅行なんだったさ。ははっ」

何が“新婚”だか。

ホント、くだらない話だ。

「そう……」

それで神楽坂との会話は終わった。僕はドアを閉め、お風呂の準備に取り掛かった。

目が覚めた。

とても、とても嫌な夢を見ていた。

気持ちが悪……。

しばらくベッドの上で丸くなり、気持ちが落ち着くまで深呼吸を繰り返す。

汗が頬を伝わりシートに落ちた。

ドク、ドクドクドク……。

不安定な動悸がやけに大きく聞こえた。

どれくらいそうしていただろう。気付けば僕は枕を抱き、胎児のような格好をしていた。

はあ。はあ、はあ　　はあ。

二、三度大きく息を吐き、身体を起こす。前髪が汗で額に張り付く。カーテンから透けてくる光はまだ弱い。目覚ましを確認するといつもより一時間ほど早い。

もう一度寝なおそうかと思っただが、止めた。

お風呂、入る。

全身に高熱が出た時のような汗をかいている。湿ったシーツと布団は今週末にでも干そうと決め、僕は着替えを持ち一階へ降りた。

シャワーで汗を流し、湯船に浸かる。嫌なことも全部流れてしまえばいいのと思うが、それがただの幻想であることはよく分かっている。パシャパシャと顔を洗い天井を見上げ目を瞑る。　　瞼に浮かんで消えるのは先の夢。昔の事だった。

この世に数多の色彩があると同時に、人の感情にも色がある。

興奮。

冷静。

調和。

興味。

関心。

憎悪。

顔色と言えはいいだろうか。目の色と言えはいいだろうか。僕には昔からそれらが目を見れば簡単に把握出来てしまった。普通の人でも顔色を見ればある程度感情を把握できるが、僕の眼はそれらが見えすぎた。

幼稚園の頃。僕と、まだ家族だった神楽坂と同じ組の子が殺される事件が起きた。

良く言えば元気な子。

悪く言えば迷惑な子。

いつも保育士さんの手を焼かせていた子で、幼いながら苛めのような事もしていた。皆から嫌われ、恐れられていたことを今でも覚

えている。

警察や新聞記者らが幼稚園に押し掛け、僕達園児や保育士達に事情聴取をしていた。その時僕も何かを訊かれたはずなのだが、それはもう覚えていない。一人の保育士が疑惑の目をした警察に質問されていた時、僕はどうしても不思議に思っただけだ。

「ねえ、せんせー。どうしても不思議に思っただけだ？」

どうして皆分らないのか不思議だった。何故なら僕にはその保育士からは明確な“殺意”の色が滲み出るように見えていたから。あの時、僕に向けられた首を締め付けられるような瞳は、今でも脳裏に焼き付いている。

それが異常である事は物心付いた頃には理解していた。

だから僕は普通であろうとし、それを恐れ、拒絶した。すると僕の視力は次第に低下していった。僕にとってそれは都合だったが、それでは日常生活に支障が出てしまうので眼鏡をかけるようになり、再び“それ”が見えてしまうことを恐れた僕はいつしか人の顔を見ることが出来なくなっていた。

ピチヨン。

天井からの水滴が浴槽の水面を叩く音が聞こえ、我に帰った。どうやら少し寝てしまったらしい。

浴槽から出て浴室の戸を開ける。それとほぼ同時に脱衣場の戸が開いた。

神楽坂が立っていた。

「……そこ、どいてくれないかな。服着たいんだけど」

「あたしも風呂だから」

神楽坂は僕の目を気にすることなく来ていたパジャマを脱ぎ、洗濯籠に入れていく。

昨日入らなかったのだろうか？

そういえば今日入る時、昨日僕が出た状態のままだった。すぐに

入ると思つてたから湯も張つていたしガスの電源も入れたままにしていた。

「そこ、どいてくれない？ 入れないんだけど」

先程の逆の言葉を言い、全裸の神楽坂は僕の真正面に立つ。前を隠そうともしない。

溜息一つ。僕は体をずらし神楽坂と入れ替わるように立ち位置を変えた。体を拭き、着替えの服を手を取った。

「あんた……その痣、前からあつたっけ？」

声に振り向けば神楽坂は僕の腰辺りを見ていた。確かにそこには小さいが青くなつた痣がある。

殴られた様な痕。

虐められた、痕。

「……別に。前からこうだよ」

「ふうん」

それで興味がなくなつたのか、浴室の戸が閉められた。僕も着替え終わり脱衣場の戸を閉めた。

時間を確認しようとしてリビングに繋がる戸を開けるといい匂いがした。匂いの元を辿るとそれはキッチンから来ているもので、昨日はなかつた鍋がコンロに置かれていた。火は付いていない。蓋を開け中を覗いてみるとカレーが程良く温められていた。

神楽坂が作つたんだろうか？

いや、作つたんだろう。現在この家には二人しかいないのだから。

まずは時計を確認。まだ学校へ行くには時間がある。一度部屋に帰つて制服に着替えようかと思つたが、匂いを嗅いでいるとお腹が空いてきてしまった。量は十分にある。おそらく今日晩まで持つだろう。見ればちゃんとご飯も炊いてある。

「……」

少しだけ悩み、頂くことにした。

お皿に盛りつけ、コップに水を注ぐ。スプーンで掬い一口含むと程良い辛さ。僕好みの味だ。素直に美味しいと思えた。時間を掛けて食べ終え、お代りをしようかどうしようかと思っていると、制服に着替えた神楽坂が入ってきた。スプーンを咥えたままお皿にご飯も盛りつけようとしていた僕を呆れ顔で一瞥すると、ソファの脇に置かれていた学生鞆を取り玄関に向かった。

「ごちそうさま」

そう廊下に向かつて言うが、神楽坂からの返事はない。玄関の扉が閉まる音だけが返ってきた。

教室へ入ると会話が止まった。

またか。

こう露骨に意識されると気まずいを通り越して疎外感を感じる。再び会話が始まるが、わざとらしく滑稽で嗤えてくる。それらを無視して俯き机に向うが、進路上に誰かの足が見えた。視線を上げると一人の男子生徒。僕より背が高いため口元を見るだけでも少し見上げることになる。

「あのさあ、ちょっと訊きたいんだけどさあ」

「……何？」

妙に馴れ馴れしい。この男子とはほとんど話したこともないはずだ。意図的に僕が避けているのだ。声が、嫌いだ。

口が不細工に歪んでいる。人を見下している口だ。

眼が、痛い。

「神楽坂の事なんだけど、あいつってさ」

「知らない」

酷く、気分が悪い。

こうして神楽坂の事を訊かれたのは初めてではない。今まで何度も好奇心旺盛な女子から尋ねられている。その時は何とも思ってい

なかった。本当に何の感情も浮かんでこなかった。

でも、今日は違った。

その話題が出るだけで、胃液が逆流するような感覚がお腹の奥から響いてきた。

「は？　でもお前神楽坂の」

「知らない！」

しん、と教室中が波が引くように静まった。

僕はその男子の脇を抜け、机に鞆を掛けると反転。教室から出た。閉めた戸の向こうからの声がいつまでも耳に残った。

屋上の扉を開けるとそこには蒼天が広がっていた。燕が空に弧を描き飛んでいる。

昨日と打って変って変って快晴となった今日は、その気候とは裏腹に僕の気分は昨日以上に曇っていた。

何であんな事言っちゃったんだろう。

先の教室での事だ。

いつもなら無関心に装えた。本当に知らないから、と何を訊かれてもそれだけ答えれば良かったはずだ。なのに今日だけは感情を抑えられなかった。

秋の風が頬に当たる。

若干の冷たさを含んだそれは紅潮した僕の顔を少しずつ冷やしていく。

はぁ、と息を吐きフェンスに向かい、いつものところに膝を立てて座る。額を膝に当て、手を膝の下に回し組み、目を瞑る。

聞こえてくるのは小鳥のさえずりとチャイムの音。

始まつちやっとな。

鞆は机に置いてあるから遅刻にはならないかなと真面目に考えている自分に嗤えた。

サボっているんだから一緒か。いや、それより悪いか。

今すぐに戻ればまだ間に合うかも知れないが、とてもそんな気分

にはなれなかった。

きい。と扉の開く音が聞こえた。

誰かが僕を探しに来たか、もしくは僕と同じくサボるために来たか。前者は、ほぼありえない。僕はあのクラスには馴染めていない。仲が良いと言えば武か、もしかしたら桐沢さんもそうかも知れない。だけど、二人とも授業をサボってまで来やしないだろう。僕なんかのためにそこまでしてほしくない。後者なら、何の問題もない。ここへ先に来たのは僕だ。後から来たものが出て行くのがこの暗黙の了解だ。

だが、今回はそのどちらでもなかった。

「あんだ、何してんの？」

呆れ声。溜息まで聞こえてきそうな雰囲気だ。驚き顔を上げるとこちらに向かつて歩いて来る神楽坂の姿が見えた。

「隣、いいでしょ？」

疑問形ではあるが、僕の返答を待つことなく隣に腰かけた。

「……何で？」

素朴な疑問を口にした。断片的な言葉ではあるが、伝わったらしい。

「それはあたしのセリフね。あんだが朝からここにいるなんて珍しいわね」

ま、理由はなんとなく分かるけどね、と続けた。どうやら完全に見破られているらしい。

「……」

「……」

それきり、特に会話らしい会話はなかった。あるとしたら、

「トイレ」

「ん」

くらいのもの。あとジュースを買ってくる時もそんな感じの受け答え。

何度目かのチャイムが鳴り、俄かに学校が賑わいだ。携帯で時間

を確認すると、どうやら昼休みに入ったようだった。

と、手に持った携帯が振動する。ディスプレイにはメールが届いたことが記されている。送信者は武だった。

『今どこにいる？ 昼飯を持っていく』

簡単な内容。どうやらお昼を届けてくれるらしかった。僕がどうい理由で教室にいないのかは理解しているようだ。僕も簡潔に返す。

『屋上』

送信ボタンを押そうとして、もう一度編集画面に戻る。

『神楽坂と一緒に』

という言葉をつけ加え送信した。少し間を置いて返信が来た。

『わかった。桐沢を連れてそちらに行く』

『ん？』

何で桐沢さんなんだろう？

『誰から？』

神楽坂が僕の携帯を覗き込む。隠そうとしたが、遅かった。

「はあ。これ佐倉からよね。伊織を連れて来るなんて、何考えてんだか……」

「うん？ 桐沢さんと仲良いの？」

「さあ、それはどうかしらね。ま、悪くはないわ」

中学校同じだしね。と付け加える。

「それじゃ、桐沢さんがいつも一緒に帰ってる友達って……」

「それ、多分あたしのことね。……あんだ、昨日伊織と一緒にだったの？」

「え、ああうん。たまたま帰り際に会ったから」

不思議だった。

さっきまで会話などほとんどなかったというのに。始まってしまえば滑らかに会話が進む。

「伊織、何か言ってた？」

「傘を置いて帰ってくれたら良かったのって言うってたよ」



「はあ、全くあの子は……」

眉間に指を添えて溜息を吐くその姿に、ああホントに仲が良いんだなと思えた。

なんだか、ちよつと嬉しかった。

扉が開き二人の姿が見えると、神楽坂は立ち上がりスカートのを払い「それじゃ」と背を向けたまま手を振り歩いて行った。武達とすれ違う時に桐沢さんの腕を掴み、そのまま引きずるようにして屋上から降りて行った。桐沢さんが去り際に手を振ってくれたので小さく返しておいた。

入れ替わるように武が僕の隣に座る。

「よつ」

「ん」

武からパンとパツクのジュース受け取り、ありがとうとお礼を言い代金を渡す。

「なに、気にするな。俺とお前の仲じゃないか」

「……」

くさい。というか、照れくさい。

こついうことを平気で言うから困る。

僕は座り方を変え、武は昨日同様にパンの袋を開け一口で食べていく。大きな口だ。僕の腕くらいなら食べられてしまいそうだ。

そうしてジツと見ているのが気になるのか居心地が悪いのか、武は頬を掻いている。あまり見ていると迷惑かも知れない。僕は視線をパンに移し口を動かした。

しばらく経ち、食べ終えた頃に武がこんなことを言ってきた。

「豊、お前好きな人とかいるのか？」

唐突だった。

武から色恋沙汰の話が出てくるのは初めてのことなので驚いた。

ようやく、かな？

僕は内心そんな事を考えていた。

武は女子から人気がある。今まで後輩の子から告白されたという

話を人伝に聞いたことが何回かある。それ以外にも、噂では色んな子に優しくしているのだから、あちこちに知り合いの女の子がいる、という話もある。どこまでが本当なのかは知らないけど、あちこちで優しくしているのは恐らく本当のことだろう。

困っている人を放っておけない。

佐倉武はそんな男だ。

だから驚きこそすれ、意外ではなかった。武にもようやく自覚が芽生えたのかと思うと少し安心する。

だって武、凄い鈍感なんだもんなあ。

「いや。僕は今のところそんな人はいないよ。武にはいるの?」

「む? ああ、いやまあ。むう……」

言い渋っている。と言うか、それはもう「いる」と言っているよ。うなものなだけだな。気付かないあたりが実に武らしい。

「まあ良かったじゃない。これで武にも春が来たということだろう」

「いや待て豊。俺はまだいるとも何とも言っていないぞ?」

「あ、大丈夫だよ。誰にも話したりするつもりはないから。ここだけのことにするよ」

「だから、俺は別に」

「ああ、そうそう。ちゃんと彼女が出来たらそっちに構ってあげなよ。僕は一人でも大丈夫だし、僕なんかと一緒にいたら彼女に迷惑だろう?」

「だから! そんなんじゃないって! それに俺はまだ告白するつもりはっ……あ」

大口を開けて時が止まったように動かなくなる。その後になってしまうといった感じで頭を掻きだした。

「ふふ、引つかかったね。武は簡単で助かるよ」

単純、と言ってもいいがそこまで言うのは止めておこう。

「ぐぐぐ……」

なんて悔しがっている姿がとても面白い。つつい含み笑いをし

てしまう。

ひとしきり笑いを堪え、ジュースを一口。間を取るようにゆっくりと吸い上げた。

「で、誰の事が好きなんだって？」

電車が止まり、エアの抜ける音がしてドアが開いた。まばらに乗っている人達が荷物を提げて降りる後に続き、僕も手提げカバンを持ち降りた。定期券を駅員に見せ駅を抜けると正面にロータリー交差点がある。一昔前にした改装のおまけで出来たこの交差点も、利用者が少ないことからすっかり無用の長物のなり果てている。慣れていないドライバーにとっては事故の元でしかない。とはいえ、事故が起こるほどの交通量はないのだけけどね。

信号を渡り主要道路から逸れて脇道に入る。途中に商店街を通りながら、僕は沈んだ気持ちで家に向かっていた。

原因は昼休みの話題。

好きな人。

“俺、神楽坂のことが……”

何で、こんな気持ちになるんだろう。

つまらない独占欲なのかも知れない。そう思うと酷く矮小な自分に嫌気が差してくる。

あの後、何と答えたら良いのか分からなくなった僕は、何も喋ることが出来なくなり、そのまま休み時間が終わってしまった。武は僕を連れて教室に戻ろうとしたが、僕はそれを断った。今更教室に戻るのには気が進まない、と言うのを理由にした。

卑怯だな、僕は。

明日は祝日で休みなのが幸いだ。こんな気分では武に合わせる顔がない。

家の玄関に着き靴から鍵を取り出し差し込み回す。しかし手ごた

えがない。

開いてる？

もしかすると今日も神楽坂が来ているんだろうか。あ、カレー。そういえばまだお礼を言っていないや。

なんて言おうか。そう思案しながら扉を開けるが、立っていたのは別の人だった。

「あ……」

「……」

僕はその姿を確認するとすぐに俯き、靴を一振りで脱ぐとその足で階段へ向かった。

「あ、あの……お、おかえりなさい」

「……」

答えることはしない。

答えたことなどない。

僕は自室に入りドアに鍵をしてベッドに横になった。

今日も昨日同様、よく晴れた空だ。

秋独特の澄んだ空気。まだ日が昇り切っていないため風が吹くと少し寒いくらい。今日は祝日のため学校は休み。けれど僕は朝から外に出ていた。

まだ帰ってこないと思っていた父さん達は急遽予定を変更したらしく、昨日には家に帰ってきていた。

父さんと、加奈子さんが。

加奈子さんは名義上現在の母親になる。当然血は繋がっていない。小学六年の後半からだから実に六年間一緒に暮らしてきた関係なのだが、まともな会話をしたことなど無いに等しい。何を話せばいいのかも分からないし、何よりどう接したらいいのかも分からない。いきなり知らない人が家にきて、「この人が今日からお前のお母さん

だ」なんて言われても実感なんてありはしない。それは六年経った今でも変わらない。

結果として、家に居辛くなった僕はこうして行く当てもなくフラフラと街を散策することになった。財布は持ってきたし、それなりにお金は入っているのだから夜まで家に帰らなくても何とかかなりそうだった。

僕は近所にある公園に入るとブランコに腰かけた。

昔は良くこの公園に遊びに来ていた。広くない面積と僅かばかりの遊具。それでも飽きもせず毎日のようにここへ通っていた記憶がある。今となつてはここで遊ぶ子供もおらず、寂れた公園になつてしまった。錆びて塗装が半分以上剥げている支柱が管理のずさんさを物語っている。

どれくらいそこにいただろうか。日が高くなり空腹を覚えた僕は公園を後にした。

そういえば昨日晩から何も食べてないや。カレー、食べたかったな。

あのカレーは二人が食べてしまったらしい。どうやら僕が作ったものと父さんは思っていたようだった。朝出がけに「美味しかったよ」なんて言われた。その時僕がどんな顔をしたかは自分では分からなかったが、父さんの雰囲気から良い表情でなかったことは確かだ。

僕は住宅地を離れ商店街へ。さらにそこを抜け駅前に来た。

休日。なおかつ快晴と言うこともあり、それなりの人が往来している。知った顔は見当たらない。そのまま歩を進め踏切を渡る。こちら側にはあまり来たことがない。何も無いから。と言えば語弊があるが、ただ単に僕の趣味に合った店がないのだ。大抵が家から駅までの範囲で事足りる。

新鮮な気分で歩いていると、一件のお店を見つけた。国道や電車から見えない位置にあるので今まで気付かなかった。小ぢんまりとした比較的新しい建物。一見すると喫茶店のようだが、外から見え

るカウンターには彩り豊かなケーキが陳列されている。店内にいくつかテーブルが設置されているから中で食べることが出来るケーキ屋なんだろう。

確かにお腹は空いている。でもケーキをご飯にするのはどうなんだろう？

考えたのは一瞬だけだった。気付けば僕の足はその店へと向かっており、入口のノブに手を掛けていた。

扉を開けるとベルの音。

放送機からではなく、実際にドア上部にベルが取り付けられていた。

いい音だな。素直にそう思えた。

「いらっしやいませ〜？」

その音に感心していると女性店員が近付き接客に来たが、どうも語尾がおかしい。と思っていると「あー！」と驚かれた。店内の幾人かの視線がこちらに向かうのを肌で感じる。

「豊、いらっしや〜い。誰かと思ったよ〜」

「へ？」

店員を見る。白いシャツに黒いエプロン。下は黒のズボンでシツクな制服。僕よりも若干高い身長。眼鏡を手で少し下げ、視力の外から見るとロングの髪をポニーにしているのが分かった。

誰だっけ？

「あ、今『こいつ誰だっけ？』とか思ったでしょ？ 酷いなあ豊は」

「え？ あ、いや……そんなことないよ。桐沢さん」

すんでのところでエプロンに付いている名札を見つけ、僕はようやくその人物が誰であるかを割り出した。

「うっそだ〜。絶対分かってなかったし。でもま、わたしも豊が一瞬誰だか分からなかったから一緒なんだけどね」

形の良い唇から舌をちよつと覗かせ笑う。

「豊って学校での雰囲気と今のと、全然違うんだもん」

「そうかな？」

「うんうん。ホラ、学校での豊って大人しい感じじゃない。でも今の恰好は結構今時って言うか、そんな感じだし。意外だよ」

それは地味って言いたいのだろうか。まああながち間違いではない。学校では極力目立たないように過ごすのが中学の時から染み付いている。変に目立つとロクなことがない。

今の服も別にファッション雑誌を参考にしているわけではない。僕はクローゼットの中から適当に選んだだけだ。それがたまたま桐沢さんの趣味に合ったのだろう。ただそれだけだ。

桐沢さんは僕を窓際の席に案内するとメニューを持ってきた。僕はその中からいくつかのケーキと紅茶を頼むと店内の店内の様子をざっと見た。店内にお客の姿は疎ら。流行っていない、ではなく純粹に時間帯が違うのだろう。少なくとも昼食時に来るような場所ではない。

どうやら全席禁煙席のようで、店内に紫煙は立ち込めていない。煙草の匂いが嫌いな僕にはありがたかった。

客層は女性ばかり。年代は様々だが、まあこの辺りは妥当なところだろう。ケーキをお昼代わりにする男は、いないとは言わないが少数派なのは確かだろう。

そうして見渡していると桐沢さんがトレイを持ってテーブルまで来た。注文したものを僕の前に並べ、何故か頼んでいないものまでテーブルに並べている。

「あの、桐沢さん？」

「いいからいいから」

そう言っって手際良く全ての品を並べ終わると、桐沢さんはエプロンを脱ぎ僕の向いに座った。

「わたし、これから休憩なの。だから一緒に食べよ」

疑問形ですらない。そもそも僕の了解を得ようとすらしていない。

ま、いつか。

幸せそうにケーキを頬張る桐沢さんに倣い、僕もフォークを取り目の前のモンブランケーキを一口掬った。

ケーキを食べ終え紅茶を一口啜る。柑橘系の酸味が甘い口内で程良く調和し良い味を出している。眼を閉じそれを楽しむようにゆっくりと喉に流し、眼を開けた。

「おいしいね」

「でしょ？ ウチのお勧めなの」

桐沢さんは嬉しそうに頬を緩める。

僕はふと素朴な疑問を思いつき、尋ねてみた。

「そういえばさ、学校、バイト禁止じゃなかったっけ？」

うっ、と声を詰まらせる桐沢さん。凶星だったみたいだ。

「案外細かいこと気にするのね、豊は。そんなんじゃ大きくなれないわよ？」

「や、普通の反応だと思うけど。少なくとも桐沢さんは優等生で通っているわけだし。それに僕の成長はもう止まっているからこれ以上大きくなることはないと思うよ」

実際、真面目な生徒ばかりの学校でも桐沢さんは優等生と言う位置付けにしている。そんな生徒が率先して校則違反しているのだから疑問に持つなと言う方が無理だ。

「いいのよ別に。校則なんて違反するためにあるようなものじゃない。気にしたら負けよ」

なんて問題発言まで飛び出した。少し前に僕に対して言った学校外での印象が違うなんて、桐沢さんの方が当てはまっている。

「優等生なんて推薦の為に作り上げた偶像よ。そんなものに拘ってたら物事の本質なんて見えないわよ？」

なかなか的を射た発言だ。別の意味で尊敬する。

「まあそんなことはさて置いて。残念だったわね、豊？」

「へ？」

「だって豊がここに来たのって愛美に会いに来たからなんでしょ？」



「は？」

何の事？ 一体全体何の話？

「え、愛美がここでアルバイトしているの知ってたから来たんじゃないの？」

「知らない。初耳だし、それ」

そもそも僕はこんなところにケーキ屋があること自体、今日初めて知ったわけだし。

「ええ！？ だって愛美言ってたわよ、『あの子甘いもの好きだから、もしかしたらここに来るかもね』って。愛美から訊いたんじゃないの？」

「いや、そんなことは聞いたことないけど………それ、ホントにま………神楽坂が言ってたの？」

一瞬。桐沢さんの口の端が広がった。

「そうよ。愛美、あんな感じだけどなんだか楽しみにしてたみたいよ？」

シフト教えてあげるから今度来てあげなさいよ、なんて言われた。

神楽坂がここで働いている？

昨日、一昨日と話す機会はあったけどそんな話題は一言も出てこなかった。まあ確かにそんな流れではなかったし、それほど長い時間話をしたわけでもない。

「いつ頃から？」

つい訊いてしまった。

何故だろう。ここ最近神楽坂の事になると自分を抑えられない。

「一か月くらい前かな？ 夏休みが終わってからよ」

わたしも一緒に働きたしたのよ、とも言った。

「最初、愛美がここで働くって聞いた時我が耳を疑ったわ」  
ひと月ほど前。

噂が立ち始めた頃。

何か あったんだらうか。

何が あったんだらうか。

「ねえ」

桐沢さんが声を潜めて言う。

「愛美のこと、知ってるんでしょ？」

何が、とは訊かない。訊くまでもない。

噂。

援助交際。

「……………うん」

「そう、なら心配いらないわ」

ふっ、と明るい口調になる。ティーカップを取り、音を立てることなく一口。

「愛美、もう止めてるわよ」

「え……………？」

「夏休み中頃くらいからね、愛美と連絡が取れなくなった時があったの。凄く心配してたんだけど、ひょっこり出てきて『あたしバイトすることにしたから』って言ったのよ。いきなりどうしたのかと思ったけど、愛美が何も言わなかったからわたしも何も訊かなかった。でもね、何となく前と雰囲気違った。吹っ切れた感じがしたの。だから、それで分かったのよ」

ま、憶測の域を過ぎないんだけどね。そう付け加えた。

言われてみればそうかも知れない。一昨日の手紙だって、別にあの日でなくともいつだって家に来たはずだ。昨日だって、今までなら絶対に僕に近付こうとはしなかった。それなのに、当たり前のように隣に座り、当たり前前の様に過ごした。今まで一度だって挨拶すら交わしたことはないというのに。

「でも、じゃあなんで……………」

噂の立ち始めは新学期からだ。桐沢さんの言っていることが正しいのであれば、その頃すでに神楽坂は援助交際をしていない。

「そう、それがわたしも不思議なのよ。夏休み中やそれ以前に見た、

ならまだ話が分かるけど、今出回っている噂は現在進行中の話よ。最近の愛美の表情を見るからにはそんなわけはないはずなのに」

カップを置き、一息。ピンク色の唇から静かな吐息が漏れる。頬杖を付き窓の外を眺める桐沢さんの横顔について見惚れてしまい、恥ずかしくなつて顔を背ける。

何をやっているんだろ、僕は。

沈黙。

普段ならこういつた沈黙は慣れてるし、その方が落ち着くのだが、今回は妙に居心地が悪かった。だから誤魔化す様に話題を少し変えた。

「ねえ、表情つて言つてたけど、それだけで人の事が分かるの？」  
さつき言つていたことだ。つい気になった。

僕のように目を見たら感情が分かつてしまうのであれば簡単だが、普通の人にそんな真似が出来るのだろうか。

「ん〜、それはちょっと語弊があるわね。わたしが分かるのは愛美の事だけで、他の人のことなんて全然よ」

「神楽坂だけ？」

そんなに分かりやすい表情していただろうか？ 顔を見なくなつて久しい僕には分からない。

しかし、桐沢さんの言つた言葉は僕の予想の斜め上に行くものだった。

「そうよ。だつて好きな人の事だもん。それくらい分かるわよ」

「……………へ？」

「あれ、言つてなかつたっけ？ わたし“百合”なの。女の子しか好きになれないのよ」

「……………は？」

沈黙。

先程感じた居心地の悪さとはまた別の違和感。何か聞いてはいけない事を聞いてしまったような後ろめたさがある。

「……………」

「……………」  
沈黙が続く。

これは、僕が何かリアクションをしなくてはいけないのだろうか。

桐沢さんの雰囲気は、本気だ。「冗談を言っているような空気ではない。」

どう、しよう……？

しかし、幸いと言うか何と言うか。丁度休憩時間が終わったのだろ。桐沢さんは店長と思しき人に呼ばれフロアに戻って行った。名残惜しそうな桐沢さんに手だけ振っておく。

席を立ち会計を済ませようとレジに行き、レジカウンターに立った桐沢さんに「今度は愛美に会いに来てね」と言われ、僕は「気が向けば」とだけ答えて店を出た。

風が吹き、少し震えた。

汗を掻いていると今更ながらに気付いた。これがどういった種類の汗かは言うまでもなかった。

教室へ入ると目の前に壁があった。

驚き思わず一歩後ずさると、それが人の背中である事と、その人が武である事がわかった。

全く、こんなところに立たないでよ。

二メートル近い身長に比較するように、武は肩幅も広い。何でこれで運動部じゃないのか三年経った今でも分からない。と、不意に武が振り向いた。僕を見て驚いたような、困ったような。そんな雰囲気漂ってきた。

また変な話で盛り上がってたんだろうか。

ここ二、三日は特に酷い。教室がその話題で埋め尽くされている感じがする。しかし、意外な事に教室内はしんと静まり返っていた。

僕が来たから、ではなく、僕が来る前からと言った感じ。クラスメイト達が見ているのも僕ではなく　武？

「豊、話がある」

そう言うつと有無を言わせず僕の腕を取り歩きだす。

「え、ちよつと」

「いいから」

僕と武の体重差は二倍近い。こうして引かれると僕になす術はない。仕方なく腕を引かれたまま付いた場所はいつもの屋上。鍵の壊れた扉を開け外へ。

快晴、とまではいかないが良く晴れた空。今日の降水確率は0%。気温も朝から高く、良い天気だ。

あー、今日もサボりかなあ。

ギリギリ、とまでは言わないがあまり時間に余裕はない。武の話がどれくらいのものなのかは分からないが、すぐに終わりそうな空気ではない。

武に引かれ、定位置となった奥のフェンス。そのまで着くと武は立ち位置を変え、僕は背をフェンスに向け、武は向かい合うように立つ。何故か武の手は僕の顔の近くにあり、フェンスの網を若干歪めている。傍から見れば、武が僕に迫っているようにも見えるかも知れない。いろんな意味で危ない体勢だ。

そしてもつと危ない発言が飛び出した。

「好きだ」

一言。

僕は目を見れないが、武は僕の目を見て言っているような気がする。とても他の人に向けて言っている言葉ではないし、何よりこの場には僕と武の二人しかない。

どうしよう？

昨日に引き続きリアクションに困る告白だ。一体僕にどうしろと言うんだろ？

しかし、僕が何を言い返そうか思いつく前に、武はこう言った。

「俺は 神楽坂が好きなんだ」

…… 一昨日聞いた言葉だった。

「本気なんだ。こんな気持ちになったのは初めてなんだ。あの日から俺の頭は神楽坂で満たされてしまった。これを好きと言わずして何と言っんだ！」

段々ヒートアップしていく武。顔のすぐ横のフェンスから「バキッ」という音が聞こえる。何が折れた音なのかは見るまでもない。武の握力は百に近かったはずだ。

「豊、聞いてくれ。俺は告白する。一昨日の言葉は前言撤回する。俺は後悔した。何である時もう少し素直になれなかったのかと。駄目だった。気にしないようにしようと、忘れようとしたが全く駄目だった。昨日の俺は家から、いや部屋から一歩も外に出ることが出来ず悶々とする事しか出来なかった。まさかここまでとは思わなかった。たった一日。たった一日顔を見れないと思っただけで俺の心はズタズタになってしまった！」

引き続き何かの折れる音。徐々にそれは僕の肩に迫ってきている。冗談ではない。こんなプレス機に挟まれたら僕の肩なんて簡単に碎けてしまう。

「噂の事も知っている。今朝だってそんな話で持ちきりだった。今までならただの噂と割り切って聞き流された。だが、今日だけは違った。俺は耐えれなかった。それは違うと、ぶつけるのを我慢できなかった」

ああ、だから教室に入ったとき静かだったのか。あれは武が何かを叫んだ後の静けさ。皆が武を見ていたのもそのせいだ。

と、冷静に考えてはいるが実際はヒヤヒヤものだ。何せ武の手はすでに僕の肩を掴んでいる。先程から少しずつ力が加えられていて結構痛い。このままでは本当に碎けてしまいそうだ。

「だから俺はっ……っ！」

「武、ちよっとストップ！ ホントに痛い」

ほとんど叫ぶのに近い。それくらい本気で声を出した。そうでも

しなくては今の武に届きそうではなからだ。結果として、それは武にちゃんと届き、尚且つ武は自分がしてしまった事に対して行き過ぎなくらい謝った。とっくに始業のチャイムが鳴った中、僕は武が落ち着くまでフェンスに背を預けた。肩を触るとまだ若干温かい。しばらく経ち、肩の痛みと温もりが消えた頃、僕は武に訊いた。

「神楽坂が好きなのは良く分かったけどさ、何で急に？」

三日前。つまり神楽坂がウチに来た日にはそんな素振りは見せなかった。あの告白は次の日だ。

「ああ、それはだな……」

武曰く。手紙を貰ったあの日、部室に用があると行っていたのは嘘だったらしい。やはり武も僕と顔を合わせるのを躊躇ったのだろう、一人で先に帰ったらしい。その下りで武がまた謝りだしたので僕は「気にしてないから」と先を促した。

そして武が学校近くのスーパーによって買い物をしている時に神楽坂を見つけたらしい。

「俺はあんなところで会うとは思わなかったから少なからず驚いた。噂の事もあったし、少し気になって神楽坂の後を付けていたんだ。そしたら……」

神楽坂は食品売場を歩き、食材を手にとって見ていたらしい。となると、やはりあの時のカレーは神楽坂がその日に買ってきた食材で作ったのだろう。

「そうして見ていたら、笑ったんだ。いや、笑うなんてほどではないが、そう、微笑んだんだ。持っていたのが玉ねぎだったかジャガイモだったかを忘れてしまっくらい衝撃的だった。あの神楽坂が、まるで聖母の様に慈愛に満ちた表情で微笑むのを見て、俺は落雷を受けたかのように恋に落ちてしまったのだ」

「……」

「俺はその日どうやって家に帰ったを覚えていない。それくらい放心していた。気付くと俺は部屋のベッドの上でクラス写真の神楽坂を凝視していた。そしてそれを抱いたまま寝ていた」

「……いや」

それはどうなんだろう？ お風呂にも入っていないのだろうか。

「いや、風呂には翌朝入った。勿論、写真も忘れずにだ」

「や、それは置いて入ろうよ」

そこまでいくと一種の病気のような気がするけど。

「病気か。ふふふ、いいな。まさに病に罹ったかの如く俺は神楽坂の事で頭が一杯になってしまったのだ。インフルエンザ以上の繁殖力だった」

それは褒めているんだろうか。それとも遠まわしに蔑んでいるんだろうか。

「当然、褒めている。俺をクラスの奴らと一緒にするんじゃない。

俺はあいつらとは違う！」

とまあ。

こんな感じで実に放課後になるまで武の話は続いた。途中でまだ僕らが家族だった頃の話まで聞きたがり、最初はしゅしゅ昔話をしていたんだけど段々楽しくなってきたてきしまい、神楽坂に関するいろんなエピソードを語ってしまった。

放課後になり俄かに学校が騒がしくなってくると「しまった！？」と武が声を張り上げた。

なんと驚いたことに武は今朝に神楽坂を呼び出す手紙を下駄箱に入れていたらしい。

時間は放課後。つまり今。

場所はどこかの教室らしい。

要件は……言うまでもなく告白の為。手が早いと言うか何と言うか。武に言わせると「善は急げ」らしい。

そんなわけで、ついさっき武は清々しい声で「行ってくる！」と残り、屋上を後にした。

僕はと言うと、帰る準備をするでもなく空を見上げた。空は赤から藍色に表情を変えようとしている。夏に比べて随分日が短くなっただけだ。今更ながらに感じた。



別に武に待っていて欲しいと頼まれたわけではない。  
でも何故か、帰ろうとは思えなかった。

「もしかしたら僕は……」

見たくないだけかも知れない。

何を、なのかは自分でも良く分からない。

心の奥にわだかまる小さなモヤモヤを見ないように、僕は眼を瞑った。

明るい世界だった。

視覚的ではなく、雰囲気は明るい。

僕は廊下に立っていた。

周りを見渡すと、そこが学校ではなく自分の家である事が理解できた。

不意に声が聞こえた。

笑い声。

幸せそうな声だった。

リビングから聞こえる

開けるとソファに座る二つの頭が見えた。

父さんと、母さん。

とても仲良さげに談笑している。

「豊」

背後から僕を呼ぶ声。

神楽坂。

「豊、愛美。こっちにおいで」

父さん達に呼ばれるまま、僕は手を繋ぎ向いのソファに身を沈める。

「愛美、受験の方は順調か？」

父さんが訊く。

「ええ、特に問題ないわ。この調子でいけばスムーズにいきそうよ」

「それは良かった。豊の方はどうだ？」

「この子の方こそ、問題なんてないわよ。だってあたしなんかよりずっと優秀なんだから」

「ふふ、そんなこと言つて。愛美、本当は悔しいんじゃないの？」

「ちよつと母さん。そんなこと言わないでよ。そりゃあこの前の模試で結構差を付けられちゃったけど、まだまだ追いつける範囲以内なんだから」

「そうか、それは良かった。……それにしても、二人とも来年の春にはもう大学生か。父さん的にはまだまだ心配で目が離せないんだがなあ」

「あなた、もういい加減子離れしなさいな。二人とも子供じゃないんですから」

「そうよ。父さんはあたし達を子ども扱いしすぎなのよ。もうあたし達結婚だって出来る歳なんだから」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！まさかそんな相手がいるなんて言うんじゃないぞ!？」

「残念ながら、愛美にはいないのよねえ」

「ちよ、母さん。そんなこと言わないでよ!」

「そうか……そうか、なら安心……ん？ 愛美には？ てことは、豊にはいるってのか!？」

「さあ、それはどうかしらねえ。ねえ、豊？」

「えっ!？ ちよつとあたしはそんな話聞いてないわよ！ どういうこと、豊!」

ああ。これは夢なんだ。

いつか見た夢。

いつも見た夢。

僕達が当たり前前の家族だったらこんな風景があったのかもしれない。そんな夢。

同じ家で暮らし、同じ部屋で笑い、同じ家族として過ごす。そんな当たり前の日常は一体どこへ行ってしまったんだろう。僕を除く三人の姿が少しずつ遠ざかっていく。僕はそれを掴もうと手を伸ばすが、届かない。次第に世界はフェードアウトしていき、やがて何も見えなくなる。

いつもの夢の終わり。

僕は何も掴むことが出来ず、諦めて手を下す。

いつもならそこで目が覚める。

でも、今回は違った。

下ろしかけた僕の腕を誰かが掴んだ。

「あんだ、何してんの？」

目覚めて聞いた第一声がそれだった。

星空が見える。辺りに光源はなく、あると言えば僅かばかりの月明かり。その僅かな逆光を背負い、誰かが僕のすぐ脇に立っていた。

「あ、れ……？」

「あんだ、何してんの？」

再度訊かれ、改めて自分の状況を思い出す。どうやら僕はあのまま眠ってしまったみたいだ。下校時刻を過ぎている、なんて次元の時間ではないことは空を見れば分かる。

「……」

僕はまず体を起こしフェンスに寄りかかるように座った。

コンクリートの上で寝たせいか体のあちこちが痛い。暗くてよく見えないが、制服に変なしわが出来ているかも知れない。

そうして一通り自分の状態を確認してから漸く傍に立っている人物を見るとそこにいたのは神楽坂だった。

何でこんなとこにいるんだろ？

「それはこつちが訊きたいわよ。屋上に来たら死んだように寝てるあんたがいたんだから。流石のあたしも驚いたわよ」

呆れた口調で言い溜息を吐く。

「隣座るわよ」

相変わらず僕の返答は聞かずに当然の様に座る。

「う？」

座る……のはいいんだけど、妙に近い。前は不快にならない程度の距離を置いて座っていたけれど、今回は肩が触れ合っている。

「寒いよ。いいでしょ」

まあ確かに少し肌寒い。夜だから仕方ない。それに神楽坂はスカートも短いから余計に冷えるのだろう。

「……」

「……」

お互いに何も喋らない。聞こえてくるのは時折強く吹く風がフェンスの隙間を通る音だけ。何かのうめき声にも聞こえるその音は夜になると一段と不気味な雰囲気を漂わせる。その音がする度に神楽坂が僕に寄って来るのは気のせいではないと思う。

あ、そういえば怖いものが苦手なんだっけ。

昔は怖い夢を見た時やホラー系のテレビを見た夜とか、よく僕の布団に潜り込んできたものだ。普段強ぶってる割にこういうところは弱いんだもんな。

「ちよつと、何ニヤついてんの？ 気味が悪いわよ」

「ん？ いや、なんでもない」

「……ふうん。ならいいわ」

なんて言いながらもジリジリ寄ってきているので、既に僕の腕に抱きつくような格好になっている。

「……」

「……」

ポケットから携帯を取り出し時間を確認すると、いつもならもう

夕食を食べ終えている時刻になっていた。

心配など、してはいないだろう。夜遅くまで家に帰らないことなんて今までにも何度もあるし、帰らなかったこともある。そんな事をしていても僕に電話をしてくることなど一度もなかった。

「あんた、帰らなくていいの？」

僕の携帯を覗き時間を見たのだろう。神楽坂がそんな事を言ってきた。

「いいんだよ、別に。神楽坂こそ帰らなくていいの？」

「いいのよ、別に。それに……」

「……それに？」

「もう少しだけ、こうしていたい気分なのよ」

「……」

肩にこつんと何かが当たる感覚。神楽坂の頭が僕の肩に乗っている。

「迷惑？」

「……ううん。そんなことないよ。だって、僕も同じだから」

帰りたくない、ではなく少しでも長く一緒にいたかった。

どうしてこんな気分になるんだろう。もしかしたらさつき見た夢が影響しているのかもしれないな。

どれくらいその状態でいただろう。不意に神楽坂が訊いてきた。

「ねえ。あんた何で何も訊いてこないの？」

「何を？」

「とぼけないですよ。あたしの噂の事、知ってるんでしょ？」

ああ、確かに。ここ数日間何度か話す機会はあったけど僕は一度もその事を口に出していない。

「別に大した理由からじゃないよ。どうでもいい、つまらない意地みたいなものかも知れないな」

「なにそれ？ あんた、もしかしてあたしの事を信じてるからとか、そんな事するわけないか思っているわけ？」

口調がきついものになる。むき出しの針みたいに鋭い。

「うっん。違うよ。もっと単純なもの」

「……じゃあ何よ」

「うん。僕はね、ただ単に“聞きたくなかった”だけなんだ。直接的にも、間接的にも。僕はそんな話を聞きたくはなかった。ただそれだけだよ」

耳を塞いでしまいたかった。

視ることを拒絶した時の様に、聴くことを拒絶したかった。

その噂が真実であろうとなかろうと、ただひたすらに

「きつと僕は、神楽坂が悪く言われていることが許せなかったんだ  
と思う」

「……」

本当に、どうしようもないほどつまらない意地だった。

僕がどんなに神楽坂を遠ざけようと思っても、他人だと思おうとしても。僕は結局神楽坂と“家族”でいたかった。ただそれだけなのだ。

「……あの噂はね、本当の事よ」

少し前の事なただけだね、と前置きをして、神楽坂は俯き話しました。

「実はね援助交際を組織的にやってるグループがあるのよ。あたしもそこに入ってた。毎日毎日、夜になると皆集まって、その中から数人選んで行かせるの。集めたお金の半分は行った子たちが取って、残りの半分は皆で遊ぶお金」

不意に月が陰り辺りが更に暗くなる。こんなに近くにいる神楽坂の顔もはつきりとは見えない。

「最初はお金が欲しかったから率先して行ってたわ。別にホテルまで行かなくてもご飯食べるだけでもお金貰えたから。でも段々行動も過激になつてきて、あたしも何度が男とホテルに入った。それが何度か続いてから、何か嫌になっちゃってね、そのグループから抜けようか考え出した頃だった」

赤ちゃんが、出来ちゃったの。

そう、息を吐くように言う。

「丁度お盆くらいの時よ。あたし、どうしようか本気で悩んだわ。でも、結局下ろすことにしたの。それを理由にグループも抜けたわ」

当然揉めたけどね、と付け加える。

「だから今流れてる噂はたぶんその子らが流してるものね。報復みたいなものなんですよ。馬鹿みたいな話よ。でもね、なーんかそれ以来すつきりしちゃってね。吹っ切れたって言ってもいいかも。普段のあたしなら絶対にしないようなことも平気でしちゃうようになったわ」

バイト。

僕の家。

そして、今。

「ふふ、変でしょ？ だってあたしは人を一人殺しちゃったのよ。それなのになんでこんなにすつきりしちゃったのかな。ホント……馬鹿みたい」

「……そっか」

一体どれだけ悩んだんだろう。

一体どれだけ辛かったんだろう。

かける言葉が見つからない。

「つまり、そういうことだったのよ。これが今流れてる噂の真相なこと。分かった？」

「うん。ありがとう」

本当に馬鹿みたいな話だった。噂だけが独り歩きしている、そんなものだった。

少しの間会話が止まる。

僕は夜空を眺め、落ち着くのを待った。

声押し殺し泣いている。

そんな気がしたから。

夜空を横切る飛行機の光が視界の端に現れ、消えていくくらいの

時間が経ってから、僕は口を開いた。

「あのさ、僕からも一ついいかな？」

「うん、なに？」

「武になんて応えたの？」

「ぶっ！」

吹き出し、僕の肩から重さが消える。

「あれ、あんたが差し向けたの！？」

差し向けた、は言いがかりだ。武は自分で勝手に行ってしまったのだから。しかし、そういう反応を言うことは、武は間違はなく告白を済ませたのだろう。

「ねえ、なんて応えたの？」

「別にどうだっていいでしょ。あんたには関係ないんだから」

「あるよ」

即答。神楽坂が呆気に取られたのが良く分かる。

「……………ないでしょ。これはあたしの問題なんだから。あんたには全然関係、」

「ある」

「……………」

「ある」

「……………」

「……………」

「……………わかった。あたしの負けよ。はあ、全く。あんた、そういう変なところで頑固なの全然変わってないのね」

「そうかな？」

「そうよ」

呆れ声の神楽坂とは対照に僕は明るい声。ほんの少しだけ優越感。

「別にあんたが期待しているような展開にはならないわよ。あたしははっきりと断った」

「うん。だと思った」



口の端を歪め、怪訝な表情を作る。僕がそう言つとは思つていなかったのだろう。

「で、武はなんて言つて告白してきたの？」

「ちよ、あんたねえ。普通そんなこと訊く？」

「いいじゃない。何か気になるし。武のあの様子だと凄く恥ずかしい告白してそうだし」

「うっ」

声に詰まる神楽坂。凶星らしい。

ああ、やっぱ恥ずかしい事言つたんだ、武。

不思議なものだ。放課後には知りたくないと思つていたのに、今では気になつて仕方がない。

「で、なんて？」

「……………だ」

ボソツと呟くように口が動いた。

「うん？」

「好きだーっ！ って、いきなり叫ばれた」

そっぽを向いてそれだけ教えてくれた。やはり言われた本人も恥ずかしいのだろう。たぶん武の事だから前置きも何もなしで始めからエンジン全開でそう告白したのだろう。どこで行われたのか気になるが、間違いなく誰かの耳には入っているだろう。武の声はかなり良く通る。

「好きだとか、愛してるとか、そんな言葉を散々叫んだあとに『お願いしますから付き合つて下さい！』って土下座までしだすのよ。勘弁してほしいかったわ」

ああ、何かその光景が目浮かぶ気がする。武ならやりそう。

「で、断つたんだ」

「ええ、当然よ。『あたしはあんた何かに興味はない』つて言つてやったわ。あんた、何であんな馬鹿と一緒にいるわけ？」

「うん？ 何か変？」

「変よ。絶対。だつて佐倉はあんたと全然性格違つし、何で仲が良

いのか分かんないわよ」

「あはは。うん、そうかもね」

本当に全然違う。僕は内向的だけど、武は違う。友達も知り合いも多いはずだ。

「僕ね、中学の頃苛められてたんだ」

「……え？」

僕は努めて明るく話してるつもりだったけど、神楽坂は逆に静かになっていく。

「何度も何度もクラス男子達に呼び出されてね、いろんな事をされた。この前見た痣。あれもその時出来たものだよ。確かあれは木刀で殴られた痕だと思う。もう、あんま覚えてないや」

「……」

「激しくなったり弱くなったり、波はあつたけど中学三年の夏まではずつとそんな感じだった。武はね、転校してきたんだ。僕のクラスになったのは夏休みが明けてから。最初は怖かったよ。だって僕の二倍くらいの大きさだったし、僕を苛めていた男子達ともよく話してたから。ああ次はこの人にやられるんだと思ったらもう諦めるしかなかった。でもね、違ってたんだ。武は僕を苛めたりなんかしなかった。それどころか逆に僕を助けてくれた。それが自分を不利にするって分かってても、そんな事してもなんの利益にもならないって分かってても。武は僕を地獄から救いだしてくれた」

それが今から丁度三年前くらいだね。そう付け加えた。

神楽坂は何も喋らない。静かに僕の話の話を聞いている。話し始めた頃から俯いてしまったので表情は分からない。

「だから僕は武が好きなんだ。そのせいかも知れないね、仲良く見えるのは」

「……いいの？」

「え？」

顔を上げ、僕を見る。

目が 合った。

「だって、あんた……その……」

言い淀む神楽坂。でも、言いたいことは分かる。

「うん。いいんだ。だって武は神楽坂の事を好きだって言ってくれた。凄く嬉しかった。だから僕はそれを応援したい。今度は僕が武の力になりたいんだ」

「……卑怯よ。そんなの」

「うん。分かってる。確信犯だから」

僕は笑う。

笑顔が上手に作れているかは、あまり自信がない。

でも、笑う。

「……馬鹿」

そんな僕を神楽坂は罵る。

「ホント……馬鹿」

そういう神楽坂の顔は、今にも泣きそうだった。

久しぶりに見た顔が泣き顔なんて、僕は本当に馬鹿だと思う。

翌日教室へ入るといきなり大男に抱きつかれた。

「豊！ ゆうたかあ！ 聞いてくれ！ 聞いてくれえ！」

「うぎゅ」

「驚いた！ 奇跡だ！ 奇跡としか言いようがない！ ああ、何と  
言うことだ！ 俺は神に愛されているのではないのか！」

「ぎゅ」

「昨日告白したんだ！ その時はテンパってて自分が何を言ったの  
かも覚えていない。ただ断られたと思ってた。だが！ 違ったん  
だ！ 聞いてくれ！ 本当に驚いたんだ！ なんと今日下駄箱を開  
けると手紙が入っていた。そこに書かれた場所に向かうと！ 聞いて  
いるのか豊！ これは本当に奇跡なんだぞ！ いいかよく聞け！  
なんとそこには神楽坂がいるじゃないか！ しかも昨日の話を〇

Kしてもいいとの事だったんだぞ！　ありえない！　本当に奇跡としか思えない！」

「むぎゆう」

「ありがとう！　豊、本当にありがとう！　俺の話を聞いてくれてありがとう！　これはお前がいなければ成し得なかった奇跡だ！

これはお前が作った奇跡なんだ！　ああチクシヨウ！　俺は今、お前の事が大好きだあ！」

「きゆう」

死ぬ。これは本当に死んでしまう。胸板が苦し過ぎる。誰か助けて……。

「コラ！　武君何をしているのよ！」

「む！　桐沢か、邪魔をするな！　俺は今、豊と喜びを分かち合っているのだ！」

「だからってそんなに力一杯抱きしめてどうするのよ！　早く放しなさい！　苦しがつているでしょう！」

「む、確かに豊の様子がおかしいな。おい、大丈夫か豊？」

「な、なんとか」

頭がフラフラする。何か抱きしめられて何回も回転されたような気分だ。これは酔う。

「ちよつと武君？　舞い上がるのもいいけど、もう少し考えなさいよ。女の子はもっと丁寧な扱いなさい」

「むう。確かに不謹慎だったな。豊、悪かった」

「いあ、別にそれはいいんだけど」

ううん。何か嬉しい言葉を聞いた気がするけどいまいち覚えてないなあ。何だっけ？

「あんたら、朝から何してんの？」

「あ、愛美。聞いてよそれがね、」

「うおお！　神楽坂！　ありがとう！　本当にありがとう！　大好きだあ！」

「ちよ！　あんた朝から何叫んでんのよ！　いい加減にしなさい！

あんまりしつこいとあの言葉は取り消すわよ！」

「ぐ、すまん。ごめんなさい。俺が悪かったです。許して下さい」

「ふん。まあいいわ。ところで、何であんたはそんなにぐったりしてるのよ、豊？」

「え？ ……ああうん？ 何か人力コーヒークップに強制的に回されたから？」

「……ねえ、佐倉。あんたあたしの豊に何したのよ？」

「えっ！？ いや、それは……その……」

「答えなさい。さもないと……」

「ちよつと、大丈夫だって。何ともないよ。か……愛美」

「本当に？ まだ気分が悪いんじゃないの？ あんたは乗り物酔いとかも激しいんだから。ホラ、スカートもめくれてるじゃない」

「わっ、ホントだ。ありがと、愛美」

「……で？ 何であんたはニヤニヤしながら見てるのよ伊織」

「え、いや、いい眺めだな」と思って」

「……あんた、豊に変なことしようと思ってないでしょうね？」

「さあ？ それはどうかしら？ でも、思ったとしても仕方ないんじゃない？ だって豊ってすぐく可愛いんだもん」

「豊に変なことしたらただじゃおかないわよ？」

「豊、平気か？ 悪かったな」

「うん。平気、もう大丈夫」

「すまなかつたな。つい欲望を抑えられなかった。今度からは気を付ける」

「ん、出来ればそうして。じゃないと僕、嬉しくて死んじゃいそうだから」

「ああ、気を付け……え？」

「佐倉、あんた人に告白しておいて次の日には浮気？ いい度胸してるじゃない、あんた」

「いつ！？ 待て！ 違う、誤解だ！ 俺と豊はそんな関係ではなくてだな……」

「そだね。“ただのお友達”だもんね……」

「さくら、あんた豊を悲しませるなんて随分な事してくれるわねえ？ 覚悟は出来てるんでしょうね？」

「ええ！？ ちょっと待ってくれ！ 俺が何をしたって言うんだあ  
」！」

……

……

……

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7212s/>

---

いつか見た夢

2011年4月25日20時25分発行